

第9回ダムWG（2004.12.1開催）結果報告		2004.12.16 庶務発信
開催日時：	2004年12月1日（火）13：00～18：25	
場 所：	京都弥生会館 2階会議室	
参加者数：	委員23名、河川管理者（指定席）13名、一般傍聴者（マスコミ含む）171名	
<p>1．決定事項：特になし</p> <p>2．審議の概要</p> <p>ダムが与える環境への影響に関する意見交換</p> <p>委員より、「環境とダム」について説明がなされた後、資料1-1「環境的側面からの問題でとらえたダムの可否について」、資料1-2「ダム建設と環境面への効果、環境への影響」、資料1-3「ダムが自然環境に及ぼす影響」を用いて説明がなされた。その後、引き続き、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り（例示）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・河川法で「環境」の定義がなされていないが、環境基本法では、環境の保全について、第2条で『この法律において「環境への負荷」とは、人の活動により環境に加えられる影響であって、環境保全上の支障の原因となるおそれのあるものを』としている。また、「予防原則」については、第4条で『環境の保全は...（中略）...科学的知見の充実の下に環境保全上の支障が未然に防がれることを旨として、行われなければならない』としている。</li> <li>・河川の価値をどのように評価するのか。河川管理者には、河川を分かりやすい共有できる形で評価できるよう、真剣に取り組んで欲しい。</li> </ul> <p>ダムの調査・検討に関する説明と意見交換</p> <p>河川管理者より、資料2-1～6、資料3-1～7を用いて、丹生ダム・大戸川ダム・天ヶ瀬ダム再開発・川上ダム・余野川ダムの調査・検討について説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り（例示）。</p> <p>丹生ダムの調査・検討に関する意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・丹生ダムによる水位上昇効果は+14cmとのことだが、環境への影響は具体的にどの程度なのか。環境へのプラス効果については、現段階では把握できておらず、今後も調査・検討していく（河川管理者）。</li> <li>・丹生ダムで融雪期に水を貯めれば、琵琶湖に雪解け水が入ってこなくなる可能性がある。調査結果データをもとに河川管理者の見解を述べているが、異論も出されている。どこに見解の違いがあるのか、データを目の前にして議論させて頂きたい（河川管理者）。</li> <li>・資料2-2 P21～23によると、コイ科の産卵ピークである7月の水位上昇効果は大きくない。ダムによる水位上昇効果が正しいとしても、水位変動リズムを取り戻す効果はないと言わざるを得ない。</li> <li>・洗堰の放流量を-60cmくらいからコントロールしはじめれば、資料2-2 P25の「ダムの補給効果（平成6年渇水での運用例）」のシミュレーションは、全く違う結果になってくるのではないかと。丹生ダムから補給する前にいろいろな方法を講ずれば、グラフの線は上向きになる。当然やっつけていかなければならないという前提で説明をした。この計算ではダムからの補給の効果がどの程度あるのかということをお示ししている（河川管理者）。</li> <li>・天ヶ瀬ダム再開発によって放流量が増加すれば、制限水位を上げることもあり得るのか。天ヶ瀬ダムからの放流量が増加すれば、琵琶湖の水位を早く下げられるようになる。資料2-2 P12で、制限水位を+5cmほど高めに運用する検討をしているが、天ヶ瀬ダム再開発によって放流量が増加すれば、+5cmよりも上げられる可能性はあるだろう（河川管理者）。</li> <li>・治水目的に限って言えば、丹生ダムが最良の策だろうと思うが、治水に特化したダムというのは検</li> </ul>		

討できないのか。現計画におけるダム構造や運用方法の変更まで含めて考えれば、より効果のあるダムの可能性も出てくるのではないか。

- ・ダムの寿命はどれくらいなのか。撤去コストはどの程度なのか。

ダム本体は半永久的に使用可能だと思っている。堆砂については排除によって寿命を延ばす方法が考えられる。ダム撤去費用については、今答えられるだけの知見はない（河川管理者）。

- ・ダムによる不可逆的な負の影響を、可逆的にするための準備をしておくべきだ。

川上ダムの調査・検討に関する意見交換

- ・河川管理者は、岩倉峡の現在の疎通能力を把握しているのか。

岩倉峡の疎通能力については、新たに見直した数値を資料 3-6 で示している。これまでダムWGで説明してきた数値と若干違いがあるので、新しい数値を用いて、あらためて検討結果をお示ししたいと考えている（河川管理者）。

- ・岩倉峡の疎通能力は、これまでの数値と新しい数値を比較できる資料が必要（ダムWGリーダー）。
- ・河川管理者は、引き伸ばし雨量を算出して、治水対策を考えるという基本姿勢を変えずに検討してきているが、その理由をあらためてお聞きしたい。

既往最大洪水（昭和 28 年 13 号台風）を対象にすれば、木津川下流部の新設遊水地で対応可能だが、元々のメニュー（上野遊水地 + 河道掘削 + 川上ダム）と比較すれば、治水安全度が低下することになる。河川管理者としては、治水安全度を下げない対策を採用していきたいと思っている（河川管理者）。

- ・ダムの流域に雨が降らなければ、ダムの効果は全くない。ダムだけで効果が得られるとは限らないのではないか。それよりも、いろいろなところで対応できるようにしておく方がよい。

上野遊水地の掘削や新設遊水地もやっていかななくてはならないと考えている。ただ、遊水地の整備のためには地権者との調整が必要であり、即効性のあるダム事業を実施しないという前提で地権者との調整は難しいと思っている（河川管理者）。

### 3. 一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 4 名より発言があった。主な意見は以下の通り。

- ・丹生ダムに関しては、治水よりも利水に関わる問題の方が大きい。異常湧水時に琵琶湖水位 - 150cm を死守することが重要だとしても、丹生ダム以外の代替案がある。
- ・治水にとってダムは無用だ。ダムは想定規模以上の降雨に対しては無意味。ダム依存が河道整備を遅らせた。森林荒廃による保水力低下と流木被害。堤防の欠陥。河川管理者はこれまでの河川事業を反省し、以下の点を河川整備計画に位置付けるべき。森林整備を公共事業とする。ダムを前提としない河道整備。森林保全と河道整備の実施。住民主体の流域対応と総合的対応。
- ・川上ダムの検討に用いられている流出計算は全く信じられない。島ヶ原地点の流出量は  $4000\text{m}^3/\text{s}$  以下が妥当。河川環境保全と回復を根底に据えた総合的治水、ソフト対策を取り入れた流域対応がもっとも賢明な策である。
- ・河川管理者からの提供されている岩倉峡の流下能力を検証してみたが、誤魔化した数値にはなっていないと考えている。ただ、数値の求め方については議論が分かれるだろう（ダムWGリーダー）。
- ・京都府は  $0.3\text{m}^3/\text{s}$  の水利権を放棄することを明らかにした。京都府は明言していないが、私は京都府がダム撤退を表明したと考えている。次回のダムWGで河川管理者から利水について説明が行われる予定だが、その説明内容が食い違っている場合には、河川管理者に質問をしていただきたい。

このお知らせは委員の皆様にも主な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させていただくものです。